

Interpreting the Theory of Forms on Noneism: the First Attempt

Yasuhiro WAKIJO

Noe-Meinongian theories admit nonexistent objects and are generally friendly to abstract objects like Plato's Forms. There are several different neo-Meinongian theories, and one of them is the semantic theory of G. Priest, known as "noneism". Is it possible to interpret Plato's theory of Forms on noneism?

Forms are supposed to have three characteristics about predication: predicate-correspondence, self-predication and predicate-purity. In noneism, worlds are divided into possible, impossible, and open worlds, the first two being closed worlds and the actual world a possible world. In closed worlds, predication is incompatible with predicate-purity. For example, if something is F , it must also be F or G , so more than one predicates must apply to it. Further, predicate-purity fails in any possible world: more than one predicates apply to anything whatsoever. Moreover, in possible worlds, if Forms have predicate-correspondence, self-predication is unavoidable for some of them.

Things are quite different in an open world. Since open worlds are not closed under entailment, we can hold that e.g., the Form of whiteness is white and is nothing else there: it is not true that it is colored or even that it exists; the only thing that exists in an open world is the Form of existence. We also seem to be able to admit the Forms of a golden mountain, an existing golden mountain, something both white and not white, etc., each Form safely having the three characteristics.

This is, however, an illusion. When a matrix contains more than one free variables, infinitely many one-place predicates can be obtained from it by substitution. If they all correspond to a unique Form, it can be shown that even in an open world infinitely many predicates must apply to the same Form. Thus the predicate-purity fails. One possible response is to modify the denotation function so that it allocates extensions not to matrices but directly to predicates, but it comes at a cost.

非存在主義に基づいたアイデア論解釈：最初の試み

脇 條 靖 弘

Zalta は Pelletier と共同で、自身の二重コプラ理論 (The Dual Copula Theory) に基づいて、プラトンのアイデア論の解釈を提示した (Pelletier and Zalta 2000)。これは Meiwald の提出した、二つの異なる述語付けをプラトンに見る解釈 (Meiwald 1992) を二重コプラ理論によって補強したものである。Zalta と Pelletier によれば、encoding と exemplifying という二つの述語付けを区別し、それぞれに対応した分有の仕方があると考えることで、プラトンの理論に一貫性を確保できる。^{*1}

Zalta らの研究は、現代哲学の成果を直接プラトン解釈に適用した点で非常に興味深い。Zalta の二重コプラ理論はもともとは存在しない対象についての理論、現代版のマイノン主義の一形態として発達した。Zalta の理論はすでに数十年前のものであるが、^{*2} 最近ではさらにいくつか興味深い現代版のマイノン主義が提出されている。Richard Routley の業績を受け継いだ Graham Priest の非存在主義 (noneism) もその一つである (Priest 2016)。Zalta は自身の対象理論を用いてプラトンのアイデア論のモデルを提供したが、Priest の非存在主義を用いて同じことができるだろうか。本稿はこの問いに答える最初の試みである。

1 アイデアの述語対応性、自己述定性、述語純粋性

プラトンのアイデアは、述語付けに密接に関連している。すべての一座の述語には一つのそしてただ一つのアイデアが対応すると想定し、この想定を「アイデアの述語対応性」と呼ぶことにしよう。一座の述語 F のアイデアを Φ とする。 Φ

^{*1} Zalta はまた単独で、自身の著書の中でも (Zalta 1983: 40-47) プラトンのアイデア論解釈を提示している。

^{*2} Zalta の理論の基本については脇條 2020 で紹介した。

^{*3} たとえば *Phd.*78d の「等しさそのもの、美そのもの、まさに〜であるところのもの」 ($\alpha\upsilon\tau\acute{o}\ \tau\acute{o}\ \acute{\iota}\sigma\sigma\alpha\iota$, $\alpha\upsilon\tau\acute{o}\ \tau\acute{o}\ \kappa\alpha\lambda\acute{o}\nu$, $\alpha\upsilon\tau\acute{o}\ \epsilon\kappa\alpha\sigma\tau\omicron\nu\ \delta\ \acute{\epsilon}\sigma\tau\iota\nu$) という表現が典型的な例である。

は「まさに F そのもの」と形容される。^{*3} ここで、 Φ には F という述語が述語付けられ、 Φ はそれ以外のどの述語も満たすことはない、^{*4} と想定することにしよう。そして、前者をアイデアの自己述定性、後者をアイデアの述語純粋性と呼ぶことにしよう。述語付けに関してアイデアは次の三つの特性を持つ、と想定できる。

アイデアの述語対応性 すべての一座の述語 F には、一つのそしてただ一つのアイデア Φ が対応する。^{*5}

アイデアの自己述定性 Φ は F である。つまり、 Φ には F が述語付けられる。^{*6}

アイデアの述語純粋性 Φ には「 F である」以外の述語付けはできない。

このうち特にアイデアの述語純粋性についてはただちに疑問が生じるだろう。 Φ は「 F である」以外に、例えば、「アイデアである」という述語が当てはまらないのか。あるいは、 F が「白い」の場合、 Φ には「色を持つ」という述語は当てはまらないのか。^{*7} 本稿では、アイデアがこの三つの特性を持つことを Priest の意味論の中でどこまで一貫して保持できるかを考察する。

アイデアの自己述定性と述語純粋性から、同じ一つの述語が二つの異なるアイデアに述語付けられることはないことが帰結する。したがって、すべてのアイデアにはそれに対応する一つのそしてただ一つの述語が述語付けられる。さらに、アイデアの述語対応性からその逆も成立する。つまり、すべての述語はそれに対応する一つのそしてただ一つのアイデアに述語付けられる。

2 閉鎖世界、可能世界、現実世界におけるアイデア

^{*4} 本稿では、「対象 o に述語 F が述語付けられる」と「対象 o が述語 F を満たす」は同じ意味で用いる。

^{*5} *Parm.* 130a-e では、ソクラテスがアイデアの述語対応性について疑念を表明するが、最終的に述語対応性は捨てられていないと考える。

^{*6} アイデアの自己述定性については、*Parm.* 第一部の特にいわゆる「第三の人間論」でこの原理が用いられることが有名であるが、そのほかにもたとえば *Phd.* 78d-e では、美のアイデアと諸々の美しいものが対比され、後者と違って前者が美しいのは恒常不変であると主張される。

^{*7} Zalta 1983ではアイデアの述語純粋性を認める解釈が提供されているが、後の Pelletier and Zalta 2000では、 Φ には F が含意する他の述語も述語付けできることを許容する解釈に変更されている。

■**アイデア以外の対象** われわれの住む現実世界は明らかにアイデア以外の対象を含んでいる。Priestの理論は固定対象領域の理論である*⁸ため、その解釈における対象領域 D にはアイデア以外の対象を含めなければならない。たとえば、この机、東京スカイツリー、阿蘇山、太陽、天の川銀河などである。これらの対象を o_1, o_2, \dots とし、 D に含めよう。それらのいくつかは間違いなく存在するが、アイデアを含めた対象領域内の対象すべてが現実世界で（あるいはどこかの世界で）存在すると認める必要はまったくない。たとえば、数学的対象を対象領域の中に認めたとしてもそれらが現実世界で（あるいはどこかの世界で）存在するとする立場（数学的プラトニズム）を取る必要はない。

■**閉鎖世界と開放世界／可能世界と不可能世界** Priestの意味論では、世界は閉鎖世界（closed worlds）と開放世界（open worlds）の二つに分かれる。閉鎖世界は論理的含意関係で閉じている。つまり、その世界で成立することから帰結することはすべてその世界で成立する。開放世界はその保証がない世界である。つまり、開放世界ではそこで成立していることから帰結することが成立しているとは限らない。さらに、閉鎖世界は可能世界（possible worlds）と不可能世界（impossible worlds）に分けられる。現実世界は可能世界の一つである。不可能世界は現実世界とは異なる論理法則が成立する世界である。*⁹

■**閉鎖世界では述語付けと述語純粋性は両立しない** 現実世界を含む閉鎖世界においては、アイデアに限らず何らかの対象の一つでも述語付けが成立するかぎり、その対象が述語純粋性を持つことはありえない。 $w \in C, \delta(t) = a \in D$ とすると、*¹⁰ 任意の一座の述語 F, G について

$$w \Vdash^+ F(t) \Rightarrow w \Vdash^+ F(t) \text{ または } w \Vdash^+ G(t) \\ \Leftrightarrow w \Vdash^+ F(t) \vee G(t)$$

であるので、 a に F が述語付けられるなら、「 F または G 」も述語付けられる。これは一例であるが、閉鎖世界においては述語付けは述語純粋性と両立しない

*⁸ ただし、Priest 2016: 263-280では可変対象領域の理論を採用する可能性が考察されている。

*⁹ Priestの意味論の解釈において、すべての世界の集合は W 、閉鎖世界、可能世界、不可能世界、開放世界の集合はそれぞれ C, P, I, O とされ、 $W = C \cup O, C \cap O = \phi, P \cup I = C, P \cap I = \phi, @ \in P$ である。

*¹⁰ δ は論理記号以外の記号に指示対象を割り当てる指示関数。

ことを示すには十分である。

アイデアの自己述定性はもちろん述語付けを含意するので、現実世界を含む閉鎖世界ではアイデアの自己述定性と述語純粋性の両方が成立することはありえない。二つが両立する世界があるとすれば、それは閉鎖世界ではなく、開放世界である。

■可能世界では述語純粋性は成立しない 閉鎖世界のうちでも現実世界を含む可能世界では、指示関数 δ にさらに強い制限が設けられる。可能世界では、通常どおり、 δ はプリミティブな述語にのみ外延 (extension) と共外延 (co-extension) を割り当て、*11 それ以外の述語についての言明の真偽は文の階層的構成から再帰的に決定される。そして、プリミティブな述語への外延、共外延の割り当ては、可能世界においてはこれも通常どおり網羅的 (exhaustive) かつ排他的 (exclusive) になされなければならない。すなわち、 $w \in P$ なら、すべての n 座のプリミティブな述語 P について、

$$\delta^+(P, w) \cup \delta^-(P, w) = D^n \text{ かつ } \delta^+(P, w) \cap \delta^-(P, w) = \phi$$

でなければならない (Priest 2016: 9)。不可能世界においては、これらの通常条件が緩和される。 δ はプリミティブな述語だけでなく、 $A \rightarrow B, \Box A, \Diamond A$ の形の基準式 (matrix) にも*12 外延、共外延を割り当てる。また、その割り当ては網羅的、排他的でなくても構わない。

さて、可能世界ではいかなる対象についても述語付けが避けられない。 $w \in P$ で、 P が任意の一座のプリミティブな述語であるとする、任意の対象 $a \in D$ について、

*11 δ^+ が外延を、 δ^- が共外延を割り当てる。この二つがそれに外延、共外延を割り当てるところの述語や基準式を何らかの対象に述語付ける場合、その述語付けが真になるのはその対象がその述語や基準式の外延の要素であるとき、そしてそのときのみであり、逆に偽になるのはその対象がその述語や基準式の共外延の要素であるとき、そしてそのときのみである。基準式については注*12参照。

*12 基準式と訳した a matrix (複 matrices) は式の一種で、(1) その式の中のすべての自由項が変項である、(2) それらの自由変項はどれも二度以上出現しない、(3) それらの自由変項 x_1, \dots, x_n は、基準となる何らかの順序付けにおいて、その式の中で束縛されているすべての変項より大きい最小の変項であり、左から右へと昇順に並べられている、という三つの条件を満たすものである。すべての式はある一つの基準式から自由変項 (のいくつか) を適当な自由項 (置き換え後に束縛される変項を含まない) に置き換えることで得られる。式 A の基準式を \bar{A} と表記する (Priest 2016: 17)。

$$a \in \delta^+(P, w) \text{ または } a \in \delta^-(P, w)$$

である。 $\delta(t) = a$ とすると、前者の場合、当然 $w \Vdash^+ Pt$ であるし、後者の場合、 $w \Vdash^+ \neg Pt$ ($\Leftrightarrow w \Vdash^- Pt$) である。つまり、任意の対象 a について「 P である」、 $「P$ でない」のどちらかの述語付けをした文が真になる。可能世界も閉鎖世界であるから、対象への述語付けとその述語純粋性は両立しない。したがって、可能世界では、アイデアも含めてすべての対象は不純である。

■可能世界でのアイデアの自己述定性 以上のように現実世界を含む可能世界ではアイデアの述語純粋性は成立しない。では、そこでアイデアの自己述定性は成立するのだろうか。アイデアの自己述定性にはよく知られた「第三の人間論」の問題がある。プラトンはアイデアについて次の二つの原理を保持していると考えられる。

多の上の一の原理 F であるものすべての上に、 F のアイデアが立つ。

非同一原理 F であるものすべての上に、 F のアイデアが立つとき、その F のアイデアは F であるもののどれとも同じではない。

この二つ原理とアイデアの自己述定性を組み合わせると、無限背進が生じる。^{*13}

■可能世界でアイデアの自己述定性を否定できるか この無限背進を回避するためには、二つの原理とアイデアの自己述定性のうちの少なくとも一つを否定ないし修正しなければならない。そして、可能世界ではアイデアの自己述定性を否定することが最も有力だと思えるかもしれない。その場合でも、依然として自己述定は閉鎖世界で成立する余地があるので、実害はないだろう、と。

^{*13} 有限個の F であるものからスタートする場合、無限背進は以下のようなものである。 F であるすべてのものを f_1, \dots, f_n とする。多の上の一の原理により、それらの上に F のアイデア F_1 が立つ。アイデアの自己述定性により、 F_1 も F である。非同一原理により F_1 は f_1, \dots, f_n のどれとも同一ではない。したがって、今や F であるものは f_1, \dots, f_n, F_1 の $n+1$ 個ある。多の上の一の原理により、これらすべての上に F のアイデア F_2 が立つ。アイデアの自己述定性により、 F_2 も F である。非同一原理により F_2 は f_1, \dots, f_n, F_1 のどれとも同一ではない。したがって、今や F であるものは $f_1, \dots, f_n, F_1, F_2$ の $n+2$ 個ある。多の上の一の原理により、これらすべての上に F のアイデア F_3 が立つ。……

■可能世界では、アイデアの述語対応性を認めながら自己述定性を否定することはできない。残念ながら、この対応は簡単には成立しない。大部分のプリミティブな一座の述語については、可能世界でのアイデアの自己述定性を否定することは可能である。 $w \in P$ の場合、まず、プリミティブな一座の述語 (P_n) に対応するアイデア (a_n とする) については、

$$a_n \notin \delta^+(P_n, w)$$

と解釈できる場合は問題は生じない。ここから可能世界の網羅性によって

$$a_n \in \delta^-(P_n, w)$$

が導かれる。つまり、現実世界では「 P_n のアイデアは P_n である」は真ではなく偽であることになる。

しかし、プリミティブな述語でも自己同一性述語 $x = x$ の場合、あらゆる対象にこの述語は述語付けられる。 $w \in P$ の場合、

$$\delta^+(=, w) = \{ \langle d, d \rangle : d \in D \}$$

という制限があるからである (Priest 2016: 31)。*14

さらに、プリミティブでない一座の述語の中には論理的真理を表現する述語がある。たとえば、 $P(x) \vee \neg P(x)$ などである。これらの述語があらゆる対象に述語付けられることは可能世界では避けられない。

あらゆる対象に述語付けられる述語は、その述語に対応するアイデアがもしあればもちろんそのアイデアにも述語付けられる。したがって、(アイデアの述語対応性が含意するように) すべての述語には一つのアイデアに対応するなら、ある種のアイデアには自己述定が避けられない。

したがって、アイデアの自己述定性を可能世界で否定するためには、アイデアの対象となる述語を制限し、「自己と同一である」や「白いか白くない」など、すくなくとも可能世界においてあらゆる対象に述語付けられるような述語には、それに対応するようなアイデアはない、とする必要がある。つまり現実世界を含む可能世界ではアイデアの述語対応性を認めながら、アイデアの自己述定性を否定することはできない。

*14 Priest 2016 の理論は著書の中で段階的に発展し、途中から (Priest 2016:43 以下) 対象は各世界から同一性 (identities: これは Priest 2001: 367 以下では「化身 (avatars)」と呼ばれている) への関数とみなされる。その結果、対象領域 D に加えて同一性領域 Q が解釈に追加され、指示関数 δ が n 座の述語や基準式に割り当てる (共) 外延は D^n ではなく、 Q^n の部分集合とされるに至る。しかし、本稿では議論を単純にするために、(共) 外延は D^n の部分集合と考える。

■この節のまとめ この節では、アイデアの自己述定性と述語純粋性は閉鎖世界では両立しないこと、また、可能世界ではすべての対象が不純であることが示された。また、可能世界でアイデアの自己述定性を否定するためには、アイデアの対象となる述語を制限し、アイデアの述語対応性を否定しなければならないことも明らかになった。以下ではアイデアの述語対応性を可能な限り保持する方向で考察を続ける。したがって、現実世界を含む可能世界においては、少なくともいくつかのアイデアには自己述定が成立すると考える。^{*15}

3 開放世界におけるアイデア

前節の考察から、Priest の理論の枠内でアイデアの述語対応性、自己述定性、述語純粋性の三つすべてが成立するとすれば、それは開放世界においてでしかありえないことが明らかになった。

■最初のアイデア：〈白〉 たとえば、白のアイデアはある開放世界 w において自己述定性と述語純粋性の両方を持つとしよう。つまり、その開放世界でアイデア〈白〉は白く、かつ、〈白〉についてはそれ以外のいかなる述語付けも成立しない。 P_1 を「白い」を表す一座の述語とし、以下の解釈を考える。(ただし、 P_1x は基準式。)

$$\begin{array}{l}
 D = \{a_1, o_1, o_2, \dots\} \quad C = P = \{\textcircled{a}\} \quad O = \{w\} \\
 \delta(c_{a_i}) = a_i \quad \delta(c_{o_i}) = o_1, \delta(c_{o_i}) = o_2, \dots, \\
 \delta^+(P_1x, w) = \{a_1\} \quad \delta^-(P_1x, w) = \phi \\
 P_1x \text{ 以外のいかなる基準式 } M(x_1, \dots, x_n) \text{ についても、} \\
 \delta^+(M(x_1, \dots, x_n), w) = \phi \\
 \textcircled{a} \text{ における外延、共外延の割り当てについては省略。}
 \end{array}$$

対象領域 D には白のアイデア a_1 が加わった。 c_{a_i} はそのアイデアを指す定項である。この解釈では、現実世界 \textcircled{a} が唯一の可能世界、唯一の閉鎖世界であり、また、 w が唯一の開放世界である。 w はアイデア界、つまりアイデアがアイデア本来の特性である述語対応性、自己述定性、述語純粋性の三つを最大限に持つ世界とみ

^{*15} それゆえ、第三の人間論については、現実世界や可能世界でのアイデアの自己述定性を否定する以外の別の対応方法を考えなければならない。これについては稿を改めて論じたい。

なせる。開放世界において指示関数 δ はあらゆる基準式に外延 (δ^+) と共外延 (δ^-) を割り当てる。 w においては、 P_1x だけでなくそれ以外の基準式の共外延がすべて空であることに注意してほしい。^{*16} たとえば、 P_2x が「 x は黒い」を表現する基準式だとすると「〈白〉は黒くない ($\neg P_2c_a$)」は w において真ではない (また偽でもない)。つまり、

$$\begin{aligned} w \Vdash^+ \neg P_2c_a &\Leftrightarrow w \Vdash^- P_2c_a \\ &\Leftrightarrow \delta(c_a) \in \delta^-(\overline{P_2c_a}, w) \\ &\Leftrightarrow \delta(c_a) \in \delta^-(P_2x, w) \\ &\Leftrightarrow a_1 \in \phi \end{aligned}$$

は成立しない。白のアイデアはただ白いだけであって、黒くないとさえ言えないのである。白のアイデアはそれほどに純粋に白いのである。

■「白のアイデアは存在する」は真ではない　すでに述べたように、 Priest の意味論では、対象領域 D の要素は量化 (量子子 \mathcal{Q}, \mathcal{Q} で表現される) の対象であるが、存在するとは限らない。「存在する (E)」は他のプリミティブな述語と全く同様に扱われる。特に、開放世界では他の述語の場合とまったく同様に、その基準式 (Ex とする) に外延、共外延が割り当てられる。上の解釈では、 Ex の外延、共外延とも空である。したがって、「白のアイデアは存在する」は真でも偽でもない。

アイデアはすべて本当の意味で「ある」ものであるが、それは「存在する」という意味の「ある」ではない。その「ある」は述語付けである。

■プリミティブな一座の述語に対応するアイデア　同じようにして、「白い」、「黒い」を含めてすべてのプリミティブな一座の述語 (P_1, P_2, \dots) について、それに対応するアイデア (a_1, a_2, \dots) を対象として認め、それらすべてについて自己述定性と純粋性が成立する解釈を得ることができる。先の解釈を次のように変更、拡張しよう。

^{*16} 以下本稿で検討するすべての解釈において、あらゆる基準式の閉鎖世界での共外延は空である。

$$\begin{aligned}
D &= \{a_1, a_2, \dots, o_1, o_2, \dots\} & C = P = \{\textcircled{a}\} & O = \{w\} \\
\delta(c_{a_i}) &= a_i, \delta(c_{a_i}) = a_2, \dots \\
\delta(c_{o_i}) &= o_i, \delta(c_{o_i}) = o_2, \dots \\
\delta^+(P_1x, w) &= \{a_1\} & \delta^+(P_2x, w) &= \{a_2\} & \dots \\
\delta^-(P_1x, w) &= \phi & \delta^-(P_2x, w) &= \phi & \dots \\
& \text{(ただし, } P_1x, P_2x, \dots \text{ は基準式)} \\
& \text{上記以外のいかなる基準式 } M(x_1, \dots, x_n) \text{ についても,} \\
& \delta^\pm(M(x_1, \dots, x_n), w) = \phi \\
& \textcircled{a} \text{ における外延、共外延の割り当てについては省略。}
\end{aligned}$$

この解釈をさとしよう。

■プリミティブでない一座の述語に対応するアイデア さでは、アイデアがプリミティブな一座の述語に対応するものだけに限定されているので、まだ述語対応性は成立していない。アイデアの範囲を広げるために、プリミティブでない一座の述語に対応するアイデアについて考えよう。その一つは否定 ($\neg A$) である。「白である」を P_1 とすると、「 x は白ではない」は $\neg P_1x$ で表現できる。この式が基準式だとしよう。すでに述べたように、開放世界ではすべての基準式に対して、外延、共外延が割り当てられる。アイデアの世界である開放世界 w では、ある一つの対象、すなわちアイデア〈非白〉が、そしてそれだけがこの基準式の外延に属すると考えることができる。共外延は空のままである。すなわち、対象領域に新たに〈非白〉 b_1 が加わり、この基準式の外延、共外延が定められる。つまり、対象領域は

$$D = \{a_1, a_2, \dots, b_1, o_1, o_2, \dots\}$$

となり、指示関数 δ は

$$\begin{aligned}
\delta(c_{b_1}) &= b_1 \\
\delta^+(\neg P_1x, w) &= \{b_1\} \\
\delta^-(\neg P_1x, w) &= \phi
\end{aligned}$$

となるように変更される。この〈非白〉 b_1 は $\neg P_1x$ の外延には属するが P_1x の共外延には属さないことに注意してほしい。つまりこの世界 w では、「〈非白〉は白くない」は真である ($w \models \neg P_1c_{b_1}$) が、「〈非白〉は白い $P_1c_{b_1}$ 」は偽ではない。(もちろん、それは真でもない。 b_1 は P_1x の外延にも属さない。)

■ 〈黄金の山〉 別の例として「黄金の山」を取り上げよう。これは「黄金でできている (P_3)」と「山である (P_4)」という二つのプリミティブな述語から連言によって形成される述語 $P_3x \wedge P_4x$ であると考えられる。これの基準式を $P_3x \wedge P_4y$ として、先の解釈を拡張する。対象領域 D にはアイデア 〈黄金の山〉として b_2 を加える。そして、指示関数を

$$\begin{aligned}\delta(c_{b_2}) &= b_2 \\ \delta^+(P_3x \wedge P_4y, w) &= \{<b_2, b_2>\} \\ \delta^-(P_3x \wedge P_4y, w) &= \phi\end{aligned}$$

となるように変更する。「〈黄金の山〉は黄金の山である」は真である ($w \models^+ P_3c_{b_2} \wedge P_4c_{b_2}$) が、「〈黄金の山〉は黄金である／ない ($P_3c_{b_2} / \neg P_3c_{b_2}$)」、「〈黄金の山〉は山である／ない ($P_4c_{b_2} / \neg P_4c_{b_2}$)」はすべて w では真でも偽でもない。 b_2 は基準式 $P_3x, \neg P_3x, P_4x, \neg P_4x$ のどの外延、共外延にも属さないからである。また、「〈黄金の山〉は黄金の山ではない ($\neg(P_3c_{b_2} \wedge P_4c_{b_2})$)」は偽ではない。というのは、これが偽であるためには $<b_2, b_2>$ が $\neg(P_3x \wedge P_4y)$ (これが基準式とする) の共外延に属する必要があるが、その共外延は空だからである。また、これは真でもない。なぜならこの基準式の外延に属するのは〈黄金の山にあらざ〉のアイデア (b_3 とする) だけだからである。つまり、対象領域 D には b_3 が加えられ、指示関数は

$$\begin{aligned}\delta(c_{b_3}) &= b_3 \\ \delta^+(\neg(P_3x \wedge P_4y), w) &= \{<b_3, b_3>\} \\ \delta^-(\neg(P_3x \wedge P_4y), w) &= \phi\end{aligned}$$

となるように変更される。

■ 〈存在する黄金の山〉 さらに一つ例を加えよう。「存在する黄金の山」である。現実世界でこれを満たす対象があるなら、それは存在しかつ黄金の山であるため、そのような山が現実世界のどこにも観察されないという経験的事実に反するという不合理が帰結することはよく知られている。(たとえば、Reicher 2020の第4節参照。) しかし、Priestの意味論を用いて開放世界においてこの述語を、そしてそれだけを満たす存在者、すなわちアイデア〈存在する黄金の山〉を認めても何の問題もない。手順はこれまでと全く同じである。 E が「存在する」という述語で、 $Ex \wedge P_3y \wedge P_4z$ が基準式だとする。対象領域にアイデア〈存在する黄金の山〉 b_4 を加える。そして、指示関数を

$$\delta(c_b) = b_4$$

$$\delta^+(Ex \wedge P_3y \wedge P_4z, w) = \{<b_4, b_4, b_4>\}$$

$$\delta^-(Ex \wedge P_3y \wedge P_4z, w) = \phi$$

となるように変更しよう。「〈存在する黄金の山〉は存在する黄金の山である」は w で真である ($w \models^+ Ec_b \wedge P_3c_b \wedge P_4c_b$)。しかし、それ以外に〈存在する黄金の山〉について何を述べたとしても、それは真でも偽でもない。たとえば、「〈存在する黄金の山〉は黄金の山である ($P_3c_b \wedge P_4c_b$)」は真でも偽でもない。存在述語についても同じである。たとえば、「〈存在する黄金の山〉は存在する (Ec_b)」は真でも偽でもない。 b_4 は Ex の外延にも共外延にも属さない。

■**存在のアイデア** 存在述語の基準式 Ex の外延に属するのは、アイデア〈存在する〉だけである。このアイデアを e とし、対象領域 D に加えよう。^{*17}そして、

$$\delta(c_e) = e$$

$$\delta^+(Ex, w) = \{e\}$$

$$\delta^-(Ex, w) = \phi$$

と指示関数を変更しよう。「〈存在する〉は存在する」は w で真である ($w \models^+ Ec_e$)。実際「 \sim は存在する」の形の文が真になるのはただこの場合のみである。そして、「〈存在する〉は存在しない ($\neg Ec_e$)」は偽ではなく、「〈存在する〉は存在しないことはない ($\neg\neg Ec_e$)」は真ではない。

■**矛盾した形のアイデア** 矛盾する形の述語に対応するアイデアも認めてよい。例えば、「 x は白くかつ白くない」 $P_1x \wedge \neg P_1x$ (この基準式を $P_1x \wedge \neg P_1y$ とする) を満たす唯一の対象があり、それはアイデア〈白かつ非白〉であると想定できる。 b_5 をそれとすると、

$$\delta(c_d) = b_5$$

$$\delta^+(P_1x \wedge \neg P_1y, w) = \{<b_5, b_5>\}$$

$$\delta^-(P(x \wedge \neg P_1y), w) = \phi$$

とすることができる。

このアイデアを「矛盾した」と形容するのは自然である。というのも、「〈白かつ非白〉は白かつ非白である」は真である ($w \models^+ P_1c_b \wedge \neg P_1c_b$) ので、 $p \wedge$

^{*17}「存在する」はプリミティブな述語であるので、存在のアイデアはすでに対象領域に含まれている a_1, a_2, \dots のうちのひとつであると考えて何の問題もないが、便宜的に「存在する」と存在のアイデアに特別な表記を与える。

$\neg p$ という形の矛盾が真として認められる^{*18}ことになるからである。しかし、 p と $\neg p$ という形の文がそれぞれ真になるわけではないことに注意してほしい。「〈白かつ非白〉は白い (P_1c_b)」も、「〈白かつ非白〉は白くない ($\neg P_1c_b$)」も真ではない (また偽でもない)。〈白かつ非白〉 b_5 は、「白い」「白くない」という述語の基準式 ($P_1x, \neg P_1x$) の外延にも共外延にも属さないからである。

■0座の述語は述語付けされない 0座の述語についてはどうだろうか。たとえば、「〈白〉は白い」 P_1c_a を A とすると A は w で真であるが、 A はアイデアを含むすべての対象について成立すると考えられる。しかし、このことはアイデアの述語純粋性を損なうと考える必要はないだろう。0座の述語はいかなる対象にも述語付けされない、と考えよう。

■開放世界ではアイデアの三特性のすべてが成立するのか ここまではうまくいっているように見える。開放世界の自由度の高さのおかげで、これまでのところアイデアの三つ特性である、述語対応性、自己述定性、述語純粋性がすべて保持できているように思われる。しかし、残念ながらこれは幻想である。開放世界においても、アイデアの述語対応性、自己述定性の二つを認めると、アイデアの純粋性は成立しない。以下でこのことを説明する。

■同じ基準式から無数の述語が生成される 一座の述語は式であり、すべての式はその式の基準式からその変項を適当な項に置換することで形成できる。基準式に二つ以上の自由変項が含まれる場合、その基準式から一座の述語が無数に作れる。(対象領域に無限の対象が含まれ、それらを指示する項が与えられているとする。) 大小関係 $<$ を例にしよう。たとえば、 $x < y < z$ を基準式とすると、この基準式からは、

$$\begin{array}{lll} x < x < x & y < y < c_{a_1} & c_{a_1} < z < c_{a_1} \\ x < c_{b_1} < x & c_{a_1} < c_{b_1} < y & z < c_{b_1} < z \end{array}$$

など無数の一座の述語が形成できる。これらすべての一座の述語について、その述語を満たすアイデアを認め、かつ、そのアイデアに純粋性が成立するだろうか。答えは否である。

^{*18} たとえば、〈白かつ非白かつ黄金〉のアイデアからは、この形の矛盾さえ帰結しない。帰結するのは $(p \wedge \neg p) \wedge q$ の形だけである。

■純粋性の破綻を導く議論：議論 W 指示関数が外延、共外延を割り当てるのはこれらの述語そのものに対してではなく、その基準式に対してである。これが問題を引き起こす。その基準式に自由変項が二つ含まれる述語で説明しよう。ここではその例として大小関係を取り上げるが他の多くの述語でまったく同様の議論が成立する。さて、何らかの述語に対応するアイデアが与えられているとする。たとえば、先の解釈3のとおり、「白い (P_1)」に対応するアイデア〈白〉 a_1 が与えられており、 $\delta(c_{a_1}) = a_1$ であるとする。アイデアの自己述定性により、 a_1 は一座の述語

$$P_1x \quad (1)$$

を満たす。つまり、

$$\begin{aligned} w \Vdash^+ P_1c_{a_1} &\Leftrightarrow \delta(c_{a_1}) \in \delta^+(\overline{P_1x}, w) \\ &\Leftrightarrow a_1 \in \delta^+(P_1x, w) \end{aligned}$$

である。さて、 $x < y$ が基準式だとすると、そこから次の一座の述語が形成できる。

$$x < c_{a_1} \quad (2)$$

これは「白のアイデアより小さい」という述語である。アイデアの述語対応性から、この述語に対応するアイデア〈〈白〉より小さい〉 b_{99} が新たに対象領域に含まれる。 $\delta(c_{b_{99}}) = b_{99}$ とすると、同じ基準式 $x < y$ から新たな一座の述語、「〈〈白〉より小さい〉より大きい」

$$c_{b_{99}} < x \quad (3)$$

が得られる。さて、アイデア〈〈白〉より小さい〉 b_{99} の自己述定性から、「〈〈白〉より小さい〉は白より小さい」は真であるので、

$$\begin{aligned} w \Vdash^+ c_{b_{99}} < c_{a_1} &\Leftrightarrow \langle \delta(c_{b_{99}}), \delta(c_{a_1}) \rangle \in \delta^+(\overline{x < c_{a_1}}, w) \\ &\Leftrightarrow \langle b_{99}, a_1 \rangle \in \delta^+(x < y, w) \\ &\Leftrightarrow \langle b_{99}, a_1 \rangle \in \delta^+(\overline{c_{b_{99}} < x}, w) \\ &\Leftrightarrow \langle \delta(c_{b_{99}}), \delta(c_{a_1}) \rangle \in \delta^+(\overline{c_{b_{99}} < x}, w) \end{aligned} \quad (4)$$

が成立する。二つの述語 (2) と (3) の基準式は同じ $x < y$ だからである。そして、(4) は、 a_1 が (3) を満たすことを示している。ところが、すでに a_1 は別の述語 (1) を満たしている。結局、アイデア〈白〉 a_1 は (1) と (3) の二つの異なる述語を満たす。したがって、アイデア〈白〉は述語純粋性を持たない。

この議論を議論 W としよう。議論 W が一般化できることは明白である。「白い」以外に白のアイデアに述語付けられる述語は (3) (「〈〈白〉より小さい〉より大きい」) だけではない。複数の自由変項を持つ基準式は無数にあり、そ

れから生成されてアイデア〈白〉に述語付けられる述語も無数にある。そしてこのことは〈白〉に限ったことではない。一般的にあらゆるアイデアはそれに対応する述語だけでなく、無数の述語を満たす。

■**考えられる対応** この結果に対して、いくつかの対応が考えられる。

- ・結果を受け入れる。つまり、アイデアの述語対応性と自己述定性は保持し、述語純粋性は放棄する。
- ・アイデアの述語対応性を否定する。つまり、すべての述語にアイデアが対応することを否定し、アイデアの範囲を限定する。上の例では、たとえば「白い」という述語に対応するアイデア〈白〉は認めるとしても、「〈白〉より小さい」という述語にはどんなアイデアも対応せず、対象領域に新たなアイデア〈〈白〉より小さい〉 b_{99} を含める必要はないと考える。
- ・アイデアの自己述定性を否定する。つまり、すべてのアイデアにはそれに対応する述語が述語付けられることを否定する。上の例では、たとえば「〈白〉は白い」は真であるけれども、「〈〈白〉より小さい〉は白より小さい」は真ではないとする。
- ・外延の割り当てが基準式に対して行われるという原理を破棄する。

最後の選択肢は、Priestの意味論を改訂し、開放世界の自由度をさらに高めることを意味する。極端な場合、指示関数 δ による外延の割り当ては基準式ではなく個々の述語に対して行われると考えることもできるかもしれない。その場合、議論 W は回避できる。外延が述語に直接割り当てられる場合でも、アイデア〈〈白〉より小さい〉 b_{99} の自己述定性から

$$\begin{aligned} w \models^+ c_{b_{99}} < c_{a_1} &\Leftrightarrow \delta(c_{b_{99}}) \in \delta^+(x < c_{a_1}, w) \\ &\Leftrightarrow b_{99} \in \delta^+(x < c_{a_1}, w) \end{aligned}$$

は導けるが、ここから

$$a_1 \in \delta^+(c_{b_{99}} < x, w)$$

は帰結しない。基準式による橋渡しがなくなっているからである。

ただこのように述語に直接外延を割り当てることには当然ながら代償が伴う。たとえば、ある対象を指す項 t_1 の入った一座の述語と、その述語から t_1 を同じ対象を指す別の項 t_2 に（束縛されずに）置き換えて得られる一座の述語は別の述語なので、それぞれに別のアイデアが対応することになる。たとえば、金星(o)という同じ対象を指す二つの定項「フォスフォラス」 c_p 「ヘスペラス」 c_h がある（つまり $\delta(c_p) = \delta(c_h) = o$ ）場合、 $c_p < x$ と $c_h < x$ は異なる述語なので、

それぞれに異なるアイデアが対応することになる。つまり、アイデア〈フォスフォラスより大きい〉とアイデア〈ヘスペラスより大きい〉は異なる二つのアイデアである。

これは許容できるかもしれないが、さらに悪いことに、自由変項のみが異なる一座の述語のそれぞれに別々のアイデアが対応することになる。たとえば、

$$\begin{aligned} c_p &< x \\ c_p &< y \\ c_p &< z \\ &\vdots \end{aligned}$$

はすべて「フォスフォラスより大きい」を意味する述語であるが、それらのそれぞれに異なるアイデアが対応することになる。これを避けるためには、述語の同一性を単なる記号列の同一性とは別の仕方 で規定する必要がある。

4 結び

Priest の理論によってアイデア論を解釈する場合、アイデアの述語対応性、自己述定性、述語純粋性が確保できる世界は開放世界でしかありえない。しかし、上の考察から開放世界での外延の割り当てが基準式に対して行われるという Priest の意味論を修正しないならば、アイデアの述語対応性と自己述定性を認めた場合、述語純粋性は開放世界においても維持できないことが明らかになった。

本稿ではアイデアはすべての一座の述語と対応して、アイデアの世界においてその述語を満たす対象^{*19}であると考えてきた。私はこれが正しいアイデア論の理解だと考える。もちろん、少なくとも現実世界、可能世界では複数の対象の組が二座以上の述語を満たす場合がある。しかし、アイデアの世界で複数のアイデアについて二座以上の述語付けが成立すると考えられているかは疑問である。これについては、稿を改めて考察したい。

^{*19} 述語の中に、量子子、固有名、様相演算子や条件法などが入っても同様である。たとえば、「雨が降れば必ずソクラテスの知り合いのだれかに手紙を書く」 $\square(P \rightarrow \odot(x)(Kex \wedge Ryx))$ も一座の述語 $A(y)$ なので、それに対応するアイデアが存在する。

参考文献

Meinwald, C., (1992), “Good-bye to the Third Man”, *The Cambridge Companion to Plato*. Ed. R. Kraut. Cambridge: Cambridge University Press, 365-396.

Pelletier, F. J. and Zalta, E. N., (2000), “How to Say Goodbye to the Third Man”, *Nous*, 34/2: 165-202.

Priest, G., (2001), *An Introduction to Non-Classical Logic: From If to Is*, (Cambridge: Cambridge University Press).

——, (2016), *Towards Non-being: The Logic and Metaphysics of Intentionality*, 2nd ed. (Oxford: Oxford University Press).

Reicher, M., (2020), “Nonexistent Objects”, *The Stanford Encyclopedia of Philosophy* (Winter 2022 Edition), Edward N. Zalta and Uri Nodelman (eds.), URL =<https://plato.stanford.edu/archives/win2022/entries/nonexistent-objects/>.

Zalta, E., (1983), *Abstract Objects; An Introduction to Axiomatic Metaphysics*, (Dordrecht: Reidel Publishing Company).

脇條靖弘, (2020), 〈研究ノート〉Zalta の基本的対象理論, 『山口大学哲学研究』 27:47-75.